

材木を担ぎながら 其の五 —シェーン最大の謎—

きよ ほうへん
清 方扁

「おーい！活動でも見に行くか？」中学一年生の頃、父親に連れていかれた日比谷の映画街はブロードウェイに見えました（もちろん行ったことはありませんが）。その映画街の真正面の「日比谷映画」、ロードショーです。今まで行った錦糸町の二本立て映画館ではない華やかさでした。

上映映画は「シェーン」、何の予備知識もなく見た映画ですが、日本では1953年が初公開ですから、私が中学生の60年代の上映はリバイバルのはずです。今思えば、無口な親父も息子にこの名作をみせたかったんですかね。この初めて見たロードショーが奇しくも私の生涯の「favorite movie」になりました。

シェーンのあらすじは皆様もご存知なことを前提に、これから思いつくままにシェーンについてお話します。時代は1890年頃、アメリカの歴史の汚点ともいべき牧場主と農民の利権争いも終わりに近づき、またアメリカインディアンとの争いも終了した頃の物語です。そして、そんな時代、シェーンは北に向かって流れていく途中、弱い農民の味方をし、クライマックスに敵の用心棒「早撃ちウイルソン」と対決する訳ですが、その時ウイルソンに向かって「low-down Yankeeliar (最低の嘘つき北部野郎)」と軽蔑しています。



西部劇の理想のスタイルとなったシェーン



その後の西部劇悪役スタイルの手本となったウイルソン

このセリフからもシェーンは南北戦争の南軍出身者であったことに間違いがありません。彼が自分の信じた南部が敗れ、目標を失い、アウトローに落ちていくことは容易に想像できるでしょう。

そして、この映画を永遠の名画にしたのはこの決闘シーンとジョーイ少年との別れの名シーンがあるからです。シェーンが酒場での決闘を終えて出てくると、少年が外で待っていて「Can't I ride home, behind you? (家まで乗せてってよ、後ろに乗ってもいい?)」と問いかける。ここでシェーンがジョーイ少年と一緒に少年の家族が待つ家に帰ったならば、その当時にあったB級西部劇の一作で終わってしまったでしょう。

ここからが真の名場面。シェーンはジョーイ少年にこう言いました。

「I got to be going on. I can't break the mold.
(おじさんはこのまま行くよ。やっぱり元に戻ることはできなかったよ)」

「I'm alright, Joey. You grow up to be strong and straight. (すべて終わったよ、ジョーイ。強くて真っすぐな男になるんだよ)」

泣けてきますね～このセリフ。このセリフは映画が製作された50年代、アメリカがまだベトナム戦争や湾岸戦争の後味悪い失敗を体験していない世代の自信に満ちたフロンティアスピリットを持ったアメリカを象徴していたのかもしれない。



撃たれた左手でジョーイ少年の頭を撫でているシェーン

さて、私がサブタイトルとして「シェーン最大の謎」と書きましたが、皆さんはこの映画のラストシーンをどのように解釈されましたか？

ラストシーン、シェーンは背後から左肩をライフルで撃たれ、重傷を負いながら墓場へと向かっています。このラストシーンから「シェーンはすでに死んでいるのではないか」という解釈が出てくるのですが、これは1998年上映の「交渉人」の中にシェーンの生死について議論するシーンがあり、これが発端のようです。

それに対して生存説を唱える人は

- ①左肩を撃たれているのにジョーイ少年の頭を左手で撫でているので深手ではない。
- ②ストーリーの展開から見ても、ジョージ・スティーヴンス監督にはそのような制作意図は読み取れない。と解釈しているようです。みなさんはどう思いますか？

私は生存説派です。ジョーイ少年が出会ったシェーンは、少年が大人になっても永遠にヒーローで、心の支えとして生きていくための美しい思い出として残っていたと考えます。「The call for faraway hills(遙かなる山の呼び声)」と共に去っていったシェーンは生死を超越した存在であり、変な勘ぐりで見ると、多くの人に感動と清々しさを与えるものと思います。

P.S 実際、ここ20年私は映画館に足を運んだのは数回しかありません。昨今は銀座、日比谷界限を夜な夜な徘徊する気の弱いボケ老人と成り果ててしまいました。



0.5秒の早撃ち。最近の分析では0.3秒と判明



Good bye, Shane.